特別の教科　道徳科学習指導案

2023.3.26　小林靖能

１．道徳科の授業づくりの基盤

道徳科の授業づくりの基盤は学習指導要領にある。

（１）道徳科の目標（P16）

特別の教科道徳の目標が、小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　特別の教科道徳編に次のように示されている。

「第１章総則の第１の２の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」

（２）道徳性を養うために行う道徳科における学習（P17～19）

道徳性を養うために行う道徳における学習として、小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　特別の教科道徳編に次のように示されている。

①　道徳的諸価値について理解する

…児童一人一人が道徳的価値観を形成する上で必要なものを内容項目として取り上げている。…主体的な判断に基づいて道徳的実践を行うためには、道徳的価値の意義及びその大切さの理解が必要になる。

一つは、内容項目を、人間としてよりよく生きる上で大切なことであると理解することである（価値理解）。二つは、…人間的な弱さ（人間理解）…。三つは、…感じ方、考え方は一つでない、多様（他者理解）である…。

②　自己を見つめる

…道徳的価値の理解を図るには、児童一人一人がこれらの理解（価値理解、人間理解、他者理解）を自分との関わりで捉えることが重要である。…

自己を見つめるとは、自分との関わり、つまりこれまでの自分の経験やそのときの感じ方、考え方と照らし合わせながら、更に考えを深めることである。…

③　物事を多面的・多角的に考える

…道徳性を養うためには、児童が多様な感じ方や考え方に接することが大切であり、児童が多様な価値観を前提にして、他者と対話したり協働したりしながら、物事を多面的・多角的に考えることが求められる。このように物事を多面的・多角的に考える学習を通して、児童一人一人は、価値理解と同時に人間理解や他者理解を深め、更に自分で考えを深め、判断し、表現する力などを育むのである。…

④　自己の生き方についての考えを深める

…児童が道徳的価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考えることを通して形成された道徳的価値観を基盤として、自己の生き方についての考えを深めていくことができるようにすることが大切である。…

・ 例えば、児童が道徳的価値に関わる事象を自分自身の問題として受け止められるようにする。

・ また、他者の多様な感じ方や考え方に触れることで身近な集団の中で自分の特徴などを知り、伸ばしたい自己を深く見つめられるようにする。

・ それとともに、これからの生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする思いや願いを深めることができるようにする…

（３）道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる（P20～21）

道徳性とは、人間としてよりよく生きようとする人格的特性であり、道徳教育は道徳性を構成する諸様相である道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度を養うことを求めている。…

道徳的判断力は、それぞれの場面において善悪を判断する能力である。…

道徳的心情は、道徳的価値の大切さを感じ取り、善を行うことを喜び、悪を憎む感情のことである。…

道徳的実践意欲と態度は、道徳的判断力や道徳的心情によって価値があるとされる行動を取ろうとする傾向性を意味する。…

（４）第３章　道徳科の内容（P22～71）

①　第１節　内容の基本的性格

「第３章特別の教科道徳」の「第２の内容」

学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の要である道徳科においては、以下に示す項目について扱う。

ア　１　内容構成の考え方

道徳科の内容については、学習指導要領第３章の「第２　内容」では、上記のように示した上で、各項目（以下「内容項目」という。）を示している。

イ　２　内容の取り扱い方

②　第２節　内容項目の指導の観点

Ｂ　主として人との関わりに関すること（友情、信頼）

（小学１・２年　友達と仲良くし、助け合うこと）（小学３・４年　友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと）（小学５・６年　友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、異性についても理解しながら、人間関係を築いていくこと）

（中学校　友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うとともに、異性についての理解を深め、悩みや葛藤も経験しながら人間関係を深めていくこと）

２．道徳科の授業づくりに向けて

道徳科の授業において、子ども一人一人が道徳性を育み培うことが求められている。

その子どもが育み培う道徳性の根幹が、自立・自律になると考え、理解する道徳的価値を自らの言動を律する規準とする道徳の時間の道徳性の学びにすべきと考える。

そこで、以下の２項目を踏まえて道徳科の学習指導案づくりを進める。

（１）自立・自律について

一つ目は自立・自律について次のように捉える。

「自分の人生の師は、自分自身であると自覚する。そして自分が自分で、よりよい人間性・道徳性の規準を育み培う人生の師を育て続けること。」

自分の中に人生の師を育てる育て続けようとする子ども・人は、次のような生きる力・人間力を涵養できると考える。

自他の生命と人権を何よりも尊重し、生きることの重さを知り、命ある限り生き続けようとする生きる力・人間力を育み培い涵養できる。

（２）内容項目・道徳的価値の解釈を「生きる力」の３本柱を踏まえて進める

二つ目は、子どもが内容項目・道徳的価値を学び理解し、道徳性を育む道徳的価値の解釈を「生きる力」の３本柱の面を踏まえて進めることとする。理由は、子どもが「生きる力」を育み培う学ぶ科目等に道徳科も含まれているからである。

道　徳　科　学　習　指　導　案

2023.3.26 小林靖能

１．内容項目　「友情、信頼」

２．対象学年　小学校４年生（３年生、２年生でも可？）

３．内容項目の考察（題材の考察）

（１）内容項目の道徳的価値（価値の解釈）

①　広辞苑から

本内容項目の「友情、信頼」の「友情」は広辞苑では「友人間の情愛。友達のよしみ」とある。「友」は、「常に親しく交わる仲間。友人。ともだち。」などとある。「情」は「物事に感じて起こる心の動き。主観的な意識。こころ。きもち。思いやりの心。なさけ。」などである。

「信頼」は「信じてたよること」とある。「信」は、「欺かないこと。たがえないこと。まこと。」等が記述されている。「頼」は、「たよりにすること。たのむこと。」などとある。

②　内容項目の道徳的価値

学習指導要領の「内容項目の指導の観点」及び広辞苑の記述を踏まえ、「友情、信頼」の項目には、次のような道徳的価値がある、と捉える。

ア　「友情、信頼」は、人間と人間との間に友愛・敬愛の信頼関係で築かれ、純粋に信頼関係で成り立っている人間の友愛・敬愛を示す道徳的価値である。

イ　信頼は他者が示す友愛・敬愛であるが、人間存在の基底になる道徳的価値である。

すなわち人間と人間との間に信頼関係が築かれていることは、両者が人間として理性的な友愛・敬愛の心によって結ばれている間柄である。

ウ　その信頼は、友達であるとともに、信頼を得るかどうかなどを考えずに無償の善意・何も代価がない行動を当然のように取ることができることである。

エ　信頼を友達、他者から得ることのできる具体的な道徳的価値・内容は、ウに示した無償の愛・善意・行動、ひっそりと行う行動であり、「友情、信頼」の根幹を成す価値内容である。すなわち他者に信頼できる心を育み培うことのできる究極の価値・内容であり友人間の揺るぎない友情を支えることのできる価値・内容である。

オ　エを支える道徳的価値・内容は次の各々があると捉える。

勇気。忍耐。強い意志。想像・思いやり（相手の気持ち、考え方、感情を思う、知ること）。自立。自律、等々。

カ　授業で用いる資料「泣いた赤おに」

青おにが友達の赤おにの願いを叶えるために村人達と出会うことのない遠くへ旅に出る、無償の善意ある行動をひっそりと行う価値・内容が示されている。

③　道徳的価値理解を経て自分の生き方の規準を設ける学びで

子ども一人一人が、「友情、信頼」の道徳的価値を理解し、その理解を基に自分の行動規準を設ける一連の学びにおいて、次のような道徳的に考える、判断する、表現する力、道徳性をも育み培うことができる、と捉える。

ア　子ども個々が道徳的価値の理解を経て行動規準に位置づける学びで考える力を育む

子ども一人一人が、道徳的価値を学ぶ過程で、価値を理解、人間を理解、他者を理解するなどの考える活動、及び自分を客観的に知る・自分の生き方の規準を考える活動等を通しても考える力を育み培う。

すなわち、次のような各活動の学びを通して子ども個々が道徳的、つまり人間としてよりよく生きるあるべき姿を求め続ける中で考える力を育み培う。

ⅰ　子ども個々が、人間のあるべき姿としての道徳的な心・行動がどうあるべきかを論理的に考え、自分の考えた事柄を持つ。

ⅱ　続いて個々で考えた事柄をみんなで、人間のあるべき姿として道徳的で、且つ論理的であるかを考え質し合い、事柄をまとめる。

ⅲ　さらにみんなで考えまとめた事柄を基に、見方・考え方を視点として考え、道徳的価値を深めるとともに、これからの自分の生き方の規準を考える。

イ　子ども個々は、上記のアのような各活動の学びを通して自分の考え、よしと判断した事柄を持つ。その事柄を言葉で表現することなどの活動を通して思考力とともに、判断力、表現力等を育み培う。

ウ　子ども個々は、上記ア・イのような各活動の学びを通して自分の考えを持つ、よりよく人間として生きるあるべき姿とその根底になる心の在り方などを求め続ける学びを通して、学びに向かう力及び人間性等を育み培い涵養する。

エ　子ども個々は、上記ア・イ・ウのように各活動の学びを通して、善悪を判断する能力、道徳的価値の大切さを感じ取る心情、及び自分の生き方の規準を設けるなどの道徳的実践意欲と態度等の道徳性をも養う。

（２）内容項目「友情、信頼」に関わる子どもの実態の捉え

本稿では子ども個々及び学級全体の学ぶ傾向の実態把握は省略するが、把握の基本的観点は下記の通り行うことと考える。

ア　上記（１）－②で解釈の「道徳的価値」の各観点から次のような項目が考えられる。

ⅰ　上記（１）－②のア、イから

・　友達とは、あなたにとってどのような人と考えていますか。

・　友達と約束したことはどのように考えますか。

ⅱ　上記（１）－②のウ、エから

・　あなたは友達が欲しがっていたゲームを貸すことができますか。

・　貸したゲームの代わりに友達から何かをしてもらえると思っていますか。

ⅲ　上記（１）－②のオから

・　あなたは学級の友達が困っている様子の時にどのような言葉をかけますか。

・　あなたは自分のことを自分で考え決めて行動しますか。

ⅳ　上記（１）－②のカから

資料として活用する「泣いた赤おに」の読む力、あらすじを捉える力等々を個々の子どもの状況状態を把握する。

イ　上記（１）－③で解釈した「自分の生き方の規準を設ける」の各観点から次のような項目が考えられる。

ⅰ　上記アのⅳと繋げて子ども個々が学習課題を把握・認知できるかどうか。

ⅱ　子ども個々が学習課題を一人で解決することができるかどうか。

ⅲ　みんなとの学び合いの中で、仲間分け等の活動に取り組めているか。

ⅳ　見方・考え方を視点として道徳的価値を深める学び等に取り組めているか。

ⅴ　自分の生き方の規準等を考える活動に取り組めているか。

（３）子ども個々とみんなが主体的に学び本時のねらいを学び取る方策

子ども個々とみんなが主体的・対話的で深い学び、すなわち本時のねらいを学び取る学習の方策は下記の通りである。

①　位置づける学習過程と学習活動

ア　学習過程

学習過程は学習課題追求の次のような過程を位置づける。

ⅰ　学習過程は、個々の子どもの学ぶ時にも、みんなとの学びになっても常に子どもの誰もが学習課題を主体的に追求し、考える活動に取り組めること。

ⅱ　その過程は、個の理解から広い視野・理解の形成への追求に、そして深い理解・本時のねらいを追求し、考える活動に取り組めること。

ⅲ　さらに、本時のねらいを学び取れた見方・考え方を見つめ直すことのできる考える活動に取り組めること。

イ　学習過程に位置づける学習活動

学習過程に位置づける各学習活動は、子どもの誰もが主体的な学びになるよう、子ども個々が考える活動、みんなで考え合う活動を位置づける。

また、下記の各活動は過程に位置づける順になっている。

ⅰ　子どもの誰もが資料「泣いた赤おに」を読み、あらすじを捉えることができるように、「始まり・赤おにの思い、展開１、展開２、展開３、青おにの残した手紙・終わり」の各段落ごとの言葉と挿絵を黒板に掲示すること（PC の活用もあり、以下も）。

ⅱ　子どもの誰もが学習課題の把握・学習課題を認知できること、赤おにの心情・気持ちを考えることを捉えることができるよう、個々の状態に応じた個別の支援と友達や授業者に応援を求めることを促すとともに、次の活動に入っても何を求めるのかが分からない子どもに授業者が助言を行うこと及び助言を求めるよう促すこと。

ⅲ　子ども個々が学習課題の解決に向けて自力で考える活動に取り組む学びにする。

子どもの誰もが自力で課題解決できた事柄（赤おにの気持ち）を持つことができるよう、解決する時間を保障するとともに、個々の状態に応じて個別の支援、助言を進めること。支援、助言は子どもに自己肯定感を促せる関わり方であること。

また、子どもが解決した事柄はノート等に文字や絵などで表現させること。

ⅳ　子ども個々が解決してきた事柄・赤おにの心情を発表し合い、発表された赤おにの心情を人間としての生き方としての面から質し合い、みんなで視野を広げ、形成する赤おにの気持ち・道徳的内容のまとめを考える活動に取り組む。

また、個々が考えてきた事柄を発表し、みんなで学び合い、赤おにの気持ちをまとめる活動は、価値理解、人間理解、他者理解に繋がる活動にすること。

みんなとの学び合いの中でも個々の誰もが考える活動に取り組み続けることができるよう、次のような手立てを取り入れる。

a　誰一人取り残さず、考える活動に取り組み続けさせるとともに、他者の考え方から自分の考えを客観的に知る体験を与えるために、本活動が始まり時に、発表された赤おにの気持ちの捉え方及び交流時の考え、意見などから自分が思いもよらない考え方や発想を１つ選び、選んだ理由をノートに１行ほど記述させ、子ども２人に発表させる。

b　子ども個々が考えた赤おにの気持ちを全員が知ること及び子ども個々が考えてきた事柄を拠り所に他者の事柄、考え方と比べるなど誰一人取り残さず考える活動に取り組ませるために、発表された赤おにの気持ちの事柄に、子ども個々の考えた事柄と同じ所に挙手等で繋げ、各事柄の考えてきた人数を記す。

c　みんなで視野を広げ、形成する赤おにの心情・道徳的内容のまとめを進めさせるために、発表の事柄に番号を付け、考え・意見の交流を促すとともに、仲

間分けの考え・意見に気づかなければヒントを与え、仲間分けを進めさせる。

d　子どもの誰もが学ぶことに安心して集中できるよう「誤り・間違い」を否定せず、及び「分からない」の問いかけ等にみんなで心を込めた関わり方ができる学級、及び一人一人の子どもを育成するために、該当の子どもをみんなで励まし支え、そのような集団の環境づくりに向けて授業者が積極的に的確な助言を行い、子どもが模倣できる言動を示すこと。

e　子ども個々が求めてきた赤おにの気持ちを、人としてより適切と考えられる観点からみんなで質し合い、視野を広げ形成した赤おにの気持ちをまとめる。

v　みんなでまとめた赤おにの気持ちを踏まえ赤おにの心情を深く追い求める。個で考えた赤おにの気持ちを横に繋げ、横の繋がりから縦へと追い求めて、子どもがみんなで赤おにの深い気持ち・本時のねらいを学び取る考える活動に取り組む。

そのために次のような手立てを講じる。

a　みんなでまとめた赤おにの気持ちの事柄を基に、本時のねらいを学び取ることができるとともに、子ども自身が自分を見つめる・見つめ直すことのできるよう、次のような問いかけの言葉を掲示し、ゆっくり読み伝える。

「みんながまとめた赤おにの気持ちを基に、『赤おには泣きながら心の中で青おにから教えられたことと、その教えをこれからどうしようと思っているでしょうか。』」

＊ⅰ【赤おには、青おにの行動から友情の在り方とは、友達のために無償の善意ある行動を静かに行うことなのだ、ということを教えられる。】と解釈している。

b　掲示し読み伝えた後は、子どもの反応、呟きなどがあるまで待つこと。

呟きなどがあれば､その子に再度ゆっくりみんなに同じように伝えてもらう。

２～３人の子が「あっそうか」と反応すれば、全員に伝播する、と考える。

vⅰ　子ども個々が、本時のねらいを学び取ることのできた見方・考え方を捉え直すとともに自分を知る体験をするために､ノートに見方･考え方を２行ほどに記述させ、隣の子と記述内容を交流し合う考える活動に取り組む。

＊ⅱ【他者の言動から人としてよりよい生き方としての道徳的価値を理解し、その価値を自分の生き方の規準にと考える→見方・考え方⇔問いかけの言葉から】

＊ⅲ【ここまでの方策・手だてはＰＣを活用することによって、子どもは学習の流れと時宜を的確に捉えるとともに、時間を適切に使うことができると考える。】

４．本時の展開

（１）本時のねらい

子どもが個とみんなで本時のねらいを学び取ることに端的に結びつく「学習課題」及び「見方・考え方」の思考を促す視点になる「問いかけの言葉」を記述する。

①　本時のねらい

友情は、お礼も何もないのに友達に善いことをひっそりと行うことであり、自分もそのようなことを友達にしていこうとする心情を育み培う。

②　本時の学習課題

赤おには、青おにの手紙を二度三度と読んでどうしてしくしくと涙を流して泣いたのでしょうか。

③　本時の「問いかけの言葉」

赤おには、泣きながら青おにから教えられたことと、その教えをこれからどうしようと心の中で思っているでしょうか。

④　本時の読み物資料

資料「泣いた赤おに」の有する価値。あらすじは略。

赤おには青おにの自分への行動から友情の在り方とは、友達のために無償の善意ある行動を静かに行うこと、と教えられる。このことは、「友情、信頼」の人間関係の根底を成す理性的な情愛であり、信頼は人間存在の基盤になる道徳的内容である。

⑤　準備→略

⑥　本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点・子ども個々が活動を具体化する手立て
８分	１．資料を読み、あらすじを捉える。 ２．学習課題が提示され、課題を認知する。	１．子ども個々に物語のあらすじを捉えさせるために、授業者が判読後、子ども個々に読ませる、その間に黒板に各段落の要点の言葉と挿絵を掲示する。 ２．子どもに学習課題を認知させる、解決するまで意識を持続させるために、学習課題は記述し用紙を掲示する。 ①子ども個々が、課題解決の方向を認知できるよう、子どもの自己肯定感を高める関わり方で個別の支援を行うとともに、授業者や友達に分からないなどを質問することを促す。 ②課題解決の認知が進まない子どもには、次の活動においても個別の支援を行う。 **・　子ども個々が必ず解決の方向を認知すること。**
１０分	３．子ども個々は課題解決に取り組み、泣いている赤おにの気持ちを考え、解決した事柄をノートに記述する。	３．子ども個々が自力で赤おにの気持ちを考え、自力で解決した事柄を持つことができるよう、解決への時間を保障する。 ①課題解決の方向を認知できない子どもがいれば、子どもの状態に沿って支援を進める。 ②課題解決に向けて試行錯誤的な子には、その子の考えを尊重しつつ、判断できるよう助言をする。 **・　子ども個々が必ず課題解決の事柄を持つこと。**
１５分	４．個で解決してきた事柄を発表し合い道徳的な面から考え交流し、視野を広げ形成する赤おにの気持ちのまとめを考える活動に取り組む。 ・他者の発表の事柄や考えの中で１つを選びノートに理由と併せて記述する。	４．みんなと学ぶ活動においても、子どもの誰もが考える活動に取り組み、価値理解、人間理解、他者理解に繋がる活動になるよう、次のような手立てを取り入れる。 ①考える活動を続けさせること及び他者の考えから自分の認知の仕方を知る機会にするために、活動始めに自分が思いもよらなかった他者の考えを本活動終了時に１つを選びその理由をノートに１行に記述させ、発表する課題を与える。 ②集団の中に埋没せずに他者の事柄、考え方などと比べ考える活動を進めることができるよう、発表された事柄と子ども個々が考えてきた事柄と同様なところに挙手などで繋げ、員数を記し、子ども全員が全員の事柄を知る学びの場にする。 ③みんなで視野を広げ、形成する赤おにの気持ちをまとめる活動を進めさせるために、発表の事柄に番号を付け、考

		え・意見の交流を促すとともに、仲間分けなどに気づかなければヒントを与え、仲間分けを進めさせる。 **④子どもの誰もが学ぶことに安心して集中できるよう「誤りや間違い」を受け止める、及び「分からない」の問いかけ等に、みんなで心を込めた関わり方ができる学級、及び一人一人の子どもを育てるために、該当の子どもをみんなで励まし支える、そのような集団の環境づくりに向けて授業者が積極的に的確な助言を行い、子どもが模倣できる言動を示す。** ⑤みんなで共有して視野を広げ形成して赤おにの気持ちをまとめるために、子ども個々が求めてきた赤おにの気持ちを、人としてより適切と考えられる観点に沿ってみんなで考え質し合う交流の活動に取り組ませる。 　みんなで学び合う本活動は次のようになると想定。 **＊１　子どもが考え発表すると想定する赤おにの気持ち** ア青おにが遠くへ行って悲しい。帰ってこないかな イ村の人に事情を話すことできなかったの ウ青おにが自分をそのように思っていたこと知らなかった エ自分は青おにが遠くへ行くことまで考えていなかった オ自分は青おにの気持ちまで考えていなかった。情けない カどこへ行ったか分からないので手紙が書けない キ友達・青おににとんでもないことをさせてすまない ク青おにの自分への行動に申し訳ない **＊２　みんなで視野を広げ形成する赤おにの気持ちが１つにまとまると想定** 　子ども個々は、「ア～ク」等の多様な事柄を踏まえ、赤おにの気持ちが１つにまとまる学びを通して価値理解、人間理解、他者理解できる活動となる。さらにそのような理解をより広めるために、みんなで形成する赤おにの気持ちが３つから２つ、そして理解を共有し１つにまとまるように学びを進める。 ⅰ遠くへ行って会えなくて悲しい→ア、イ、エ、カ ⅱ赤おにの願いを叶えてあげようとする青おにの気持ちに気づけなかった自分が情けない→ウ、オ、キ ⅲ青おにのことを考えなかった自分を責める→ク ↓ ⅳ遠くへ行き会えなくて悲しい→ⅰ （遠くへ行く→赤おにのことを考えての行動） ⅴ青おにの友情を示す在り方とそのことに気づけなかった自分への悔やみ→ⅱ、ⅲ ↓ ⅵ自分は友達のことをそこまで考えたことがなかった →ⅳ、ⅴ

		⑥子どもの誰もが自分の認知の仕方と比べることができるよう、子ども各自に他者の発表、考え等から自分が選んだ一つとその理由をノートに記述させ、２～３名の子どもに発表させる。
８分	５．授業者の問いかけの言葉を踏まえ、個で考えみんなで考え追求し、深い学びすなわち本時のねらいを学び取る活動に取り組む。	５．引き続いて個で考えみんなで考え、学び合う活動である。 　問いかけの言葉を踏まえみんなで考えるが、一人の子どもの呟きや発する言葉により、他の子どもに赤おにの気持ちが伝わると想定しているし、そのような知の状態になる学びをここまでに子どもの誰もが主体的・考える活動に取り組めてきている、と捉える。 ①問いかけの言葉を掲示し、子どもの反応を待つ。 　子どもにとっては「４」の活動で課題を解決できたと捉え安心している。問いかけの言葉を踏まえて考える時間を４～５分与える。他の言葉を発しないで待つ。 ②子どもの誰かが、言葉を発したら、その言葉を再度みんなに伝えるよう促し、他の子ども達の反応を待つ。 **＊１　子どもが考えると想定する赤おにの気持ち** ア自分（赤おに）にとって一番大切な友達は君だった、と伝えることができないことが悲しくて残念であるなど。 イ悲しいが友情ということを教えてくれてありがとう。教えられたことを、これからの自分の生活の中でやっていこうと思うなど。 **＊２　ア、イのような言葉が発表されれば、子ども達に確かめ、後は次のような言葉を用いて授業者が補充する。** 　「無償の善意の行動」「お礼も何もないひっそりとした行い」の友情の在り方を青おにの行動、**道徳的価値を他者の行動から教えられる。** 　そして「友情は、無償の善意をひっそりと行動することで、そのような友情を行える自分にしたい。」を言葉で表現して掲示する。
５分	６．振り返る活動 　本時のねらいを学び取ることのできた見方・考え方を再度考え、ノートに記述し、見方・考え方の活用の仕方を涵養するとともに、自分の認知の仕方を知る活動に取り組む。	６．振り返りの活動。 ①汎用的な能力の涵養に繋げるとともに、子ども各自に自分の認知の仕方を知る体験をさせるために、本時のねらいを学び取ることのできた見方・考え方を改めて考えさせ、言葉でノートに表記させ、その表記の事柄を隣の子ども同士で交流させる活動に取り組ませる。 ②低学年から取り組めば３分間ほどで終了すると考える。 　本時間の振り返る対象にしたい見方・考え方は、青おにの行動から教えられたことで、「道徳的価値を他者の行動」から学び、その善いことを自分の生活の規準に取り入れようとする自分にしたい（心を養うこと）。

「子どもを育てること」「学ぶこと」について

2023.3.26　小林靖能

子どもと学びを共にする大人が、標題２つの言葉の持つ意味を下記のように捉えることにより、子どもが主体的に学び［生きる力］を育み培い涵養できる、と考える。

１．子どもを育てること、子どもと関わることで大切にしたいこと

①　子どもを育てることに繋がる子どもがやる気を出す他者の関わり方

子どもが自分でやる気を出す他者の関わりによって、その子自身が意欲をかき立て自分が持つ資質・能力を引き出し、育ち成長する。

すなわち、子どもがやる気を出し、学びに取り組むことによって子ども自身が自分にある資質・能力を引き出し、成長することができる。

②　子どもがやる気を出し、資質・能力を引き出し成長する関わり方

子どもがやる気を出し活動に進んで取り組む根底には、自分を肯定できる心が培われているからである。その根拠は、子どもの誰もが親及び周りの大人に肯定され見守られる環境で非認知能力、自分を肯定する心を育み培い成長している事実がある。

このことは、**子どもの誰もが誰からも肯定されている、と受け止める学べる環境であることが、子どもがやる気を出し、子ども自身が自分の資質・能力を引き出し成長することに繋がる学びになる。**すなわち**授業者を始め誰もが誰もを肯定する関わり方をすることが子どもの成長に繋がることになる。**

肯定することは、優しいではない。人間として他者を否定する言動があれば、その事実を厳しく諭す。しかし、その子を否定せずに肯定する関わりをすることである。

２．学ぶこととは

①　学ぶこととは

学ぶこととは、子どもが自分の有している知識・技能を活用して新たな知識・技能を見つけ生み出すことである。

したがって、学ぶことは子どもにとって既有の知識・技能を活用し考え追求できる活動の過程を必要とする。

②　子どもが学び考え追求し知る対象は

子どもが学ぶ、考え追求する対象は学習課題になる。

授業者は、教材解釈をし本時のねらいを設定する。そして子どもが本時のねらいを学び取る内容を仕組んだ学習課題を設定し、子どもの学ぶ対象とする。

すなわち、学習課題を解決すれば、本時のねらいを学び取ることのできる内容が課題として示すことになる。

③　子どもが学び考え追求する学習過程と各学習活動

子どもが学習課題の解決に向け考え追求する過程は、課題解決学習過程である。

各学習活動は「課題の提示・認知→個で考え課題解決の活動→みんなで視野を広げ解決の事柄をまとめる活動→見方・考え方から本時のねらいを学び取る活動→振り返る活動」を位置づける。

④　子どもが学ぶ根底

子どもの誰もが学ぶ根底は、自分を肯定でき心情・感情を育み培えることである。